Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-17

「昼寝の夢」の夢(一海知義教授停年退官記念特集)

安井, 三吉

(Citation)
近代,74:30-38

(Issue Date)
1993-06

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001324

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001324

「昼寝の夢」の夢

安井三吉

サントリーの広告で、『朝日』であることは確信していたが、それがいつのものだったのかということになると、あたまをたたいてもいっこう浮かんでこない。あれこれ探してみたがだめだった。けっきょくご本人に尋ねるのがいちばん早い。

「たしか、アサヒだったと思いますが、いつだったでしょうか？」

さいわいにして先生は、短いエッセイの類に至るまで、詳細な目録を作られている。

「のっているはずだよ」

と。いそいで目録を追った。

一九七七年四月二四日　昼寝の夢　朝日、毎日、読売各朝刊『酒の寓話』10

「中国の文化大革命と一海先生」、そんなことでなにか書いてみようかとも考えたが、手がかりが少ない。日本の中国研究者を試練に立たせたあの波乱の時代を先生はどのようにすごされたのか、どんなことをお考えだったのか、いちどぜひお聞きしておきたいとおりにふれて思いながら、ついに機会を逸してしまった。そこで「昼寝の夢」である。新聞を開いていきなり先生にでくわしたあの時のおどろきを、いまでもなつかしく思いだす。それはそれとして、なにを書いたらよいのだろう。先日、陳舜臣さんの「朝日賞」受賞のお祝いの席で、文学部のある先生とご一緒した。はなしは、一海先生に及ぶ。うまいな、といわれる。おはなしもいいですよ、とわたしがいった。そうだ、文章がう

まくて、はなしが上手というのはすくないね、ふつうはどちらかひとつというものだけど、というのが文学部の先生の説である。そこで、先輩からはじまって、ひごろおつき合いをさせていただいている先生がたにひとりひとりご登場願って、それぞれどの型かひとしきりお酒の肴にさせていただいた。

どの型にも属さない、つまり文もはなしもみるべきものをもたないわたしは、正直途方にくれざるをえない。そこで、一計を案じた。そうだ、「師夷長技以制夷」、テキノ得意ワザヲ盗ンデテキヲヤッツケヨウ、これだ。歴史の勉強はときには役に立つ。さっそく、図書館に行き、書庫から『朝日新聞』の昔の縮刷版をひっぱりだしてきた。目的はひとつ、テキの書いた「昼寝の夢」を探し、コピーすることにある。その夜、わたしは、「昼寝の夢」のコピーを枕のしたにおいて眠ることにした。お酒はたっぷり飲んだし、あした目がさめたら、原稿はできたも同然。

「夢」をみることになっていた。当然李白が、陶淵明が、そして陳舜臣がでてきて、一海先生が司会者となって座談がくりひろげられる、わたしは、そばでこれを筆記しておればよい。贅沢このうえない顔ぶれだが、わたしはやはり不満をおぼえないわけにはいかない。なぜ、司馬遷先生をお呼びしないのかと、わたしは、司会者に文句を述べた。こたえは、なぜかあいまいである。

「唯唯、否否。(うん、うん。いや、いや。)」

そこまで、考えたところで寝入ってしまったらしい。お酒を飲むとどうも朝が早くなる。すこし白んできていたが、まだ六時にもなっていない。しまった、なにもあたまに残っていないではないか。そこで、もうひと寝入りすることにした。今度は直ぐにというわけにはいかなかったが、数日来のつかれがたまっていたせいか、やがてうつらうつらしてきた。

なぜ、座談会をやらなかったのですか、と司会者に詰問した。あいかわらずはっきりしない。本人が言わないので、まわりのひとにそれとなく尋ねてみると、やはり心配していたことが起こったのだ。

「一杯、一杯、復一杯（イーベイ、イーベイ、フーイーベイ」

まず、陳舜臣が会場に到着した。どこかでみたようなおとこが、自分の書いた『桃花流水』の本のことについてぶつぶつひとりごとをいいながら、ごきげんだ。まあ、ちょっとまってみようと陳は思った。しばらくして李白がやってきた。すでにどこかでやってきたらしい。陳舜臣と李白がはなしていると、最後に陶淵明が悠然とあらわれた。司会者はまだ気がつかないようだ。「三百」、と司会者は、大声で叫ぶや気もちよさそうにことんと横になり、そのまま眠ってしまった。よくみると、かれらの詩集や著書を枕にしているではないか。はらをたててもしようがないので、三人は、むしろこれさいわいと司会者をそのままにして、ゆきつけの飲み屋にゆくことにした。

しかし、さすが、一海先生である。夢だ。夢さえあればそれで十分なのだ。まんなかに茅台ならぬ、サントリーのオールドをおき、そのまわりにくるまざに李白ら四人がすわっている。司会者は、「一杯、一杯、復一杯」と数えはじめた。こうしないと、この四人は始まらないらしい。わたしは、司会者に、どうして司馬遷先生をお呼びしないのかと、かさねて尋ねた。こたえは、まえとまったくおなじだった。

「唯唯、否否。」

司馬遷にこだわるのは、わけがある。司馬遷が歴史家だからということももちろんその理由のひとつであるが、実は、かって、先生の書かれた『史記』（筑摩書房、一九七三年）、『中国古典選』一（朝日新聞社、一九七八年）を教科書として使ったことがあるからだ。筑摩のはあげた記憶はあるが、それで教えてくれなどと頼んだおぼえはないよ、

といわれそうだ。まったくのはなしである。ある短大で、東洋史を教えていたところ、とつぜん、来年は東洋思想史（？）をやってもらえないでしょうか、現在の担当の方が高齢でもうご無理なのです、というのが依頼の理由である。むろん、固辞したのだが、結局ひきうけざるをえないはめにおちいってしまった。ただ、そのときすこしばかりこころが動いたのは、先生の筑摩の『史記』のことが念頭にあったからだ。その一年は、いささか、『史記』について勉強をしたつもりである。翌年継続することになった。しかし、こまったことにこの本が売り切れて、しかも筑摩には当分再版を出す予定がないということが、新学期開始直前になってわかった。あわてて探したのが、朝日新聞社版の『史記』だった。教科書としては扱いにくいが、いたしかたない。またまた一から準備のしなおしであった。ただし、こちらの方は、一年でお役御免になったので、わたしの勉強も第一冊でおわってしまった。あのときもうすこし苦労しておけばよかったと、いまでは悔まれる。

紀元前九九年、匈奴に投降した李陵を弁護したため、武帝の怒りをかって死刑の判決を受けた司馬遷は、翌年それを免れたものの、今度は宮刑という屈辱的な刑に処せられた。司馬遷にとってこの事件は、「『史記』完成の最も強烈な内的な動機」（筑摩版、二九頁）と、先生は位置づけている。そしてこうも書かれている。

「司馬遷の父が高く評価した道家の思想の中に、『天道に親なく、常に善人に与す』という命題がある。（『老子』第七十九章）。『天の道にえこひいきはなく、常に善に味方する』。はたしてそうだろうか。正義の立場とそれにもとづく行動に対して、常にそれにふさわしい報いがあるだろうか。むしろその逆のケースが多いのではないか。現に李陵および司馬遷自身にくわえられたむごい仕打ちは、あの命題に反するのではないか。

しかし、歴史家司馬遷はそれを『直接話法』の形では訴えない。『史記』全体の総論だといわれる『伯夷列伝』（列伝第一篇）の中で、彼はこの懐疑論を展開する。『天道は、はたして是か非か』」。（二八頁）

そこで、わたしは尋ねた。

「先生は、いかがお考えですか、天道は、是でしょうか、それとも非でしょうか。」しばらく間をおいて、

「是だ」

とおっしゃった。そこで、また、わたしは反問した。

「そうでしょうか?」

また目がさめてしまった。

やりかたがまずいと悟った。やはり、昼寝でなければだめなのだ。さて、この次は、毛沢東に登場してもらおう、当然、河上肇、エドガー・スノーにも来てもらいたい。できたら司馬遷にもお願いしよう。まずは、詩について。はなししばらくして、突然毛沢東が、先生に尋ねる。

「ところで、きみはわが国にまだきたことがないそうだが、なにかわけがあるのかね。」

やはり昼寝にかぎる。グラスをかたむけながら。そして、なによりも肝要なことは、先生の著書を枕にして横になることだ。

一九九三年二一日

昼寝の夢

一海知義

イラストレーション　風間　完

（『朝日新聞』一九七七年四月二四日朝刊より）

夢の中ではじめて先生に会ったのは、あれはいつのことだったか。今は記憶にない。

先生は山の中にいた。奥深い山だった。渓流にのぞんだ小さな庵に、先生は住んでいた。どうしてこんな山奥にひとり住んでおられるのですか、と私はたずねた。

先生は、笑って答えない。――ああ、この人は李白さんだな、と私は思った。

余ニ問フ　何ノ意ゾ　碧山ニ棲ムト
笑ッテ答ヘズ　心　自ラ閑ナリ
桃花流水　窅然トシテ去リ
別ニ天地ノ人間ニ非ザル有リ
間余何意棲碧山
笑而不答心自閑
桃花流水窅然去
別有天地非人間

――いったいどういうつもりで碧の山、奥深い山中にすむのか、とひとは私にきくが、私はノーコメント、笑って答えず、ただ私の心はひとりのどかである。

桃の花びらを浮かべた谷川の水は、窅然と、いずことも知れず、流れ去る。そんなここには、別格の天地がある。人間、人の世とはちがう、別の一天地がある。

「山中問答」と題するあの李白の詩を、私は思い出していたのである。別の題を「山中ニテ俗人ニ答フ」という。

あなたは、李白先生ですね、と私はいった。先生はまた、笑って答えない。しかし私は、これは李白だ、李白にちがいない、と思った。とすると、今は八世紀か。一体どうなっているんだろう。しかしまあいい。よい機会だ。一つたずねたいことがある。

「桃花流水」というのは、陳舜臣、といってもご存知ないでしょうが、陳舜臣の最近の小説の題にもなっていますが、水に浮かんで流れるのは、あれはどうして「桃」の花でないといけないのですか。

私は、ヤボな質問だナ、やはりおれは「俗人」だナ、と思

いながら、そうきいた。

先生は、今度は笑わなかった。笑わないで、ちょっと不快そうな顔をした。が、おもむろに口を開いて、こういった。ああ、それは陶さんに聞くんだナ。——陶さん、陶淵明か。

でも、といおうとして、目がさめた。私は読みさしの本を枕にして、昼寝をしていたのである。本は、李白の詩集だった。

二度目に、やはり夢の中で先生に会ったとき、先生は神戸のさんちか・タウンのメンズコーナーで、買い物をしていた。夕暮れの時で、ショウウインドウの光がまぶしかった。李白がこんなところで買い物をしていいのかなあ、と思ったが、とりあえず私は先生をあるバーに誘った。先生が何の買い物をしていたのか、大いに興味があったが、きくのも悪い気がして、遠慮した。先生はこころよくついて来てくれた。六甲山の中腹に住んでいる陳舜臣氏をたずねての帰りだという。先生は前の夢の中での私の質問を、気にしていたのかも知れない。

その夜、私たちは大いに飲んだ。先生の飲みっぷりは、すさまじかった。「一日須ク三百盃ヲ傾クベシ」という勢いである。私は「イーベイ、イーベイ、フウイーベイ——一杯、一杯復た一杯」とうたい出したい衝動をおさえた。先生に叱られそうな気がしたからである。かわりに、杜甫が作った「李白を夢む」という長い詩を、朗誦した。これは夢なんだ、夢の中なのだ、という自覚があったからかも知れない。先生はグラスを傾けながら、ちょっとさみしそうな顔をしてきいていた。

さいごがどういう仕儀に相成ったか、よくおぼえていない。私が先にダウンしたのは、もちろんである。夢からさめたとき、夢はまだつづいているような、宿酔のような気分だったことを、おぼえている。

何よりも残念だったのは、先生と陳舜臣氏がどんな問答をかわしたか聞きそびれたこともそうだが、前の夢での質問のつづきができなかったことであった。

先生は、陶さんにきけ、といわれた。そうだ、陶淵明に会おう。先生に紹介してもらえばよい。陶淵明は、私の最も畏怖する詩人である。紹介もなしに会えば、足がすくんで、口もきけないだろう。

私は、あるうららかな春の一日をえらんで、李白の詩集の

上に淵明詩集一冊をかさね、枕をやや高くして、昼寝をした。

ところが、――うかつにも熟睡し、夢を見なかった。昼寝からさめた私は、ソッとあたりを見まわし、誰も見ていないのをたしかめてから、二つの詩集を本棚にもどしひとり赤面した。

バカなことはやめにして、私は考えた。淵明の「飲酒」と題する詩に、次のような一節がある。

廬ヲ結ンデ　人境ニ在リ
而モ車馬ノ喧シキナシ
君ニ問フ　何ゾ能ク爾ルヤト
心遠ケレバ　地モ自ト偏レルナリ

結廬在人境
而無車馬喧
問君何能爾
心遠地自偏

――人里に庵かまえて、しかも車馬のざわめきなし。人はいう、なぜそうなのかと。気の持ちようで、土地もへんぴに。

李白のさきの詩に「余ニ問フ何ノ意ゾ碧山ニ棲ムト、笑ッテ答ヘズ心自ラ閑ナリ」というのは、たぶん淵明の右の詩句をふまえて、それを李白風にちょっとひねってあるのだろう。

淵明が隠者でありながら山中に逃避せず「人境ニ在リ」と言うのは、なかなかいい。しかし、李白が「君ニ問フ」と言わずに「余ニ問フ」と言い、淵明のように解答を出さないところも、またいい。「笑ッテ答ヘズ心自ラ閑ナリ」。

ところで、李白の後半の句の「桃花流水」、その桃の花びらは、これも淵明を意識しているにちがいない。あのユートピア物語「桃花源記」をふまえているのだろう。ひとりの漁夫が谷川をさかのぼってゆくうちに、桃の花のさく林に出あい、そのむこうにユートピア（理想郷）を見つける、あの物語である。李白の「別天地」は、淵明の「桃源郷」につながっている。

私はそう思った。先生のヒントで、私の疑問は解けた。しかし、淵明に会いたい、という気持ちは、おさえがたかった。何としても会いたい。そうして「桃花源記」そのものについても聞きたい。桃源郷は、何ともつましいユートピアである。金殿玉楼もなく、山海の珍味も出ない。そこには、中国の平凡な農民の暮らしがあるだけである。しかし、税金がな

い。誰も税金をとらないし、とられない。そこがあの物語のポイントだと思うのだが、そこのところを、もっとつっこんで聞きたい。また、淵明は孔子を尊敬していたが、時に鋭い孔子批判のことばを詩句にのこしている。儒仏道の三教が、この複雑な詩人の中でどう併存相克していたのか。さらに、今の中国での「孔子批判」に対する感想なども聞けたら、と思う。

なぜ会えないのだろう。私は、ふと気づいた。はじめて先生に会ったとき、そして二度目のときも、私は昼寝の前に微醺を帯びていた。いささかきこしめしてから、寝たのである。酒を飲み、詩集を枕にすること。

私はさっそく実験した。が、ムダだった。淵明はやはり夢にあらわれない。赤面するだけだった。その後、先生の方は、何度か姿を見せ、ほかの詩人たちも、私の願いをかなえてくれた。そのつど私は楽しい思いをし、いくばくかの知識をえた。その後ずっと、私はひとりひそかに昼寝の効用を楽しんでいる。だが、淵明と、そしてもう一人、杜甫だけはどうしても夢にあらわれない。醒めた詩人には、醒めて対せよ、ということだろうか。

しかし私は、希望をすてていない。ひまができると、好きな詩人の詩集をいそいそととり出し、グラスを横において、読みはじめるのである。